

# 知 覚 と も の

——ヒューム哲学を手懸かりに——

岩 崎 豪 人

この論文の目的は、知覚という概念を明確にし、その有効性を示すことにある。知覚という語で私が念頭に置いているのは、ロックが「観念」と呼びヒュームが「知覚」と呼んだ対象である。現代的に「知覚表象」と言ってもよい。それゆえ、私が目論んでいるのはある意味で一種の表象主義の擁護であるとみなされるかもしれない。私はそれをヒュームの議論を手懸かりにして行いたい。まず、最初にヒュームの議論のアウトラインとその検討を行う。そして、日常的なレベルでの「もの」の存在と理論的レベルでの「知覚」の存在を区別することの必要性を示す。次に知覚の因果説と表象主義は独立の主張であることを確認し、知覚因果説のヒューム哲学における位置を示す。また知覚の科学的（物理的生理的）説明は知覚因果説を含意せず、表象主義とも両立し得ることを見る。最後に日常的な知覚の事態と、知覚の科学的説明、表象主義の関係について論じ、洗練された形での表象主義は知覚の分析にとって有効な方法であることを示す。

## I ヒュームの議論

ヒュームの議論にはいる前に、その用語法について注意しておくべきだろう。ヒュームは「知覚」という語を、感覚的知覚、身体的快苦、情動、記憶、想像といったあらゆる人間精神の対象に対して用いる。「知覚」は「印象」と「観念」に分かれる。「印象」とは、感覚、情念などが心に最初に現われた時の知覚であり、観念はそれらを思い出す時、あるいは想像や思考、反省を行う時の心の知覚である。印象と観念の違いは心を打つ時の「力と生气」の程度にある。また「感じる」と「考える」の違いとも言われる。それゆえ、ヒュームの言う「知覚」は、ロックやパークリの言う「観

念」に対応し、ヒュームの「観念」は、その下位区分に当たる。もう一点注意しておかねばならないのは、「知覚」は、知覚作用ではなく、知覚内容を指すという点である。「印象という用語によって、我々の生き生きとした知覚が心に生み出される 仕方を表現するのではなく、ただ知覚そのものを表現すると理解してもらいたい」(T2n)<sup>14</sup>。

ヒュームの物体と感覚知覚についての議論は、『人間本性論』第一巻 第四部第二節「感官に関する懐疑主義について」で行われる。ヒュームはまず、「どんな原因が我々に物体の存在を信じさせるのかと問うことはよいが、物体が存在するかどうか問うことは無駄である。それは我々のあらゆる推論において当然のこととしなければならない点である。」(T187)と言う。ここでの「物体」が、知覚を引き起こす外的存在(物理的物事)を言っているのではないことに注意する必要がある<sup>15</sup>。そうした知覚とは別の存在については、ヒュームは明確にその存在を否定している。ここで言われる物体は、むしろ知覚や物理的物事といった理論的な説明以前の、我々の素朴な概念を指していると考えらるべきであろう。むしろそのような素朴な物体の概念とは何かを明確に述べることは、非常に困難ではある。分析の対象は「物体の存在の是非」ではなく、「物体の存在を信じる理由」である。「対象が感官に現われていない時にさえ、我々が対象に連続的存在を帰するのは何故か」という問題と、「我々は対象が心と知覚から別個な存在を持つと思うのは何故か」という二つの問題が区別される。さらに、後者の別個性には、外的な位置と存在及び作用の独立性とが含まれる。これらの物体の契機の中で一番重要であるのは連続性である。

ヒュームはまず、連続的で心から別個な存在という考えは、感官や理性ではなく想像力から生じるという。また、すべての知覚に対して我々は連続的に存在すると考える訳ではないから、ある感覚印象に特有の性質と想像力の共同作用によって、その考えが生じるはずである。その性質とは「恒常性」と「整合性」である。「今、私の目の前にある山々、木々、家々はいつも同じ並び方で私に現われている。そして眼を閉じたり、頭を回したりして、それらを見なくともすぐ後で少しの変化もなしに再び現われるのを見出す」(T194)。ただし、このような恒常性は確かにたびたび観察されるが、いつも完全な訳ではない。物体は位置や性質をたびたび変化させる。しかしその際にも変化には規則性、整合性がある。「私が一時間不在の後、部屋に戻ると火が部屋を出る前と同じ状態に無いことを見出す」が、こうした変化の中でも物体は整合性を保ち、規則的に依存し合っているため、私は連続的存在の考えを保つ。ヒュームは

恒常性を整合性より基本的と考える。そこで議論の中心は、感覚的印象の恒常性から連続的存在の信念が生じる機構の解明ということになる。

ヒュームは、それを「自分が感じ見ているまさにそのものに連続的、別個存在を帰する」普通の人の考えに基づいて議論する。議論は次の四つの部分からなる。第一は個体化あるいは同一性の原理である。不変な対象に同一性を与えることの説明を行う。第二は、同一性を中断している知覚にも帰する理由の説明である。それは中断の前後の印象が類似していることと、中断のない対象と中断のある対象を見る際の心の状態が類似していることから説明される。第三は中断した現われを連続的存在という虚構によって結び付ける心の傾向の説明である。第四は、我々は連続的存在を偽造するだけでなく信じるのでその信念が生じる機構の説明である。

ところが、ここで議論は物体の存在の信念が生じる機構の解明という所期の目的を越えて進む。つまり連続的存在の信念自体が虚構であり、普通の人の考えが誤っている、と断定するのである。その根拠は、二重視、距離によって対象の見かけの大きさが変化すること、形の見かけの変化、病気の時に色や他の性質が変化すること、などの経験である。このような経験は知覚が心から独立ではないことを示している。連続的存在は、独立存在を含意し、独立存在はこれらの経験によって否定されるのであるから、知覚に連続的存在を帰することは間違いであると分かる。

そこで哲学者は「その体系を変えて、知覚と対象を区別し、……前者は中断し、消え去り、現われる度に異なったもの、後者は中断せず、連続的な存在と同一性を保つと想定する」(T211)。この哲学者の体系は「知覚」と「対象」という二種類の存在を認める「二重存在説」であり、いわゆる知覚表象説である。しかし、ヒュームはこの修正を「一時的な治療に過ぎず、普通の人の体系のあらゆる困難と、それ自身に特有の他のいくつかの困難を含んでいる」(T211)と言う。理性によって分かるのは、我々にとって確実な存在は知覚のみであり、それは非独立で中断しているということである。一方の存在から他方の存在を推論するには因果関係が必要であるが、因果関係は二対象の過去における恒常的连接を必要とする。知覚以外のものは心に現われないのであるから、知覚と対象の間には因果関係は成立せず、対象の存在を推論することはできない。また、想像力によれば我々は普通の人の考え(素朴実在論)を最初に抱くのであり、哲学的体系(知覚表象説)を採ることはない。哲学的体系は理性の示すこと(知覚が、非独立で非連続的であること)と、想像力の傾向(連続的存在の想定)

という二つの矛盾する原理の「奇形の子」なのである。

ヒュームはここで、矛盾を解決する第三の説を提出するのではなく、この問題の理論的な解決を放棄する。そして「不注意と無頓着」という実際的な手段によって「外的内的両方の世界があると確信することを当然のことと考える」(T218)という立場に戻る。物体についての信念は理論的、理性的には正当化できないのであり、もし正当化できないものは認めないという立場に立てば懐疑論が帰結するが、ヒュームは決して懐疑論を主張している訳ではない。我々が普通に抱く信念、心の傾向を捨てることはできないし、理性によって否定することもできないのである。たとえ、物体の存在を理論的に正当化することができないとしても、物体の存在を我々は確信しているのであり、それは否定できない事実なのである。そうした自然な信念、自然な心の傾向こそがヒュームの最終的な拠所であった。そして、理性が懐疑に陥ることを示すことによって、自然本性の重要性と大きな力を明らかにすることがヒュームが懐疑的議論を展開した一つの目的であった、と考えることができる。

## II ヒュームの議論の検討

ヒュームの解決が以上のようなものであったとしても、なお疑問が残らざるを得ない。知覚と物体の問題は、理論的には解決不可能な問題なのだろうか。もう一度議論の出発点に戻ろう。ヒュームの議論の核心は、中断した知覚をどのようにして連続的に存在していると信じるようになるか、の説明にある。例えば我々は林檎を見ている時、まばたきをしたとしても、そのまだたきの間つまり林檎を見ている間に林檎が存在していない、とは思わないだろう。知覚が中断していても、林檎は連続的に存在していると我々は信じている。そうした信念の生じる機構を説明することがヒュームの所期の目的だった。ヒュームは、これを二つの類似性から説明する。その一つは中断の前後の印象が似ていること、もう一つは中断があり類似している印象を見る時の心の働きと、不変化で同一の対象を見る時の心の働きが似ていることである。つまり、林檎を見ている時、まばたきの前後の印象は類似しているし、まばたきがあった時と無い時の心の状態も類似している。それゆえ我々は、まばたきをした時(知覚に中断があった時)と、まばたきをしなかった時(知覚に中断がなかった時)とを取り違え、中断のある印象を中断のない連続的な印象と誤って考える。しかし、中断

した知覚に同一性を帰するのは矛盾であるから、この矛盾を隠すために連続的存在の考えが捏造される。

ヒュームは、物体の存在を信じることを、中断のある知覚を連続的存在と取り違えることとみなした。このように規定すれば、普通の人の考え（素朴实在論）は、誤りである他はない。しかし、我々は中断する知覚を同一の連続的に存在するものと間違えて考えているのだろうか。ここで、議論を分かりやすくするために、触覚を例にとりたい。

今私は目隠しされて、見知らぬ部屋に投げ込まれたとする。まず私のすることは手探りで、何かに触れないか手を伸ばしてみることだろう。ここで私は何かに触れたとしよう。このことを表象から記述すれば、触覚における印象（表象）が生じている、としかいえないだろう。何かに触れた時に感じる触覚の印象を  $f_1$  とする。もう一度確かめる為と同じ様に手を伸ばし、また何かに触れるとすると、今度は  $f_1$  に似た印象  $f_2$  が生じることになる。ここで私は、ある角度である程度手を伸ばせば、何かに触れると考える。そこには「もの」があると思うであろう。その「もの」は、私が触れなくても、つまり、触覚における印象が生じていなくても、連続的に「存在している」と考えるはずである。

問題はヒュームの言うように、中断している知覚  $f_1, f_2$  を同一の連続的に存在するものとみなすかどうか、である。最初に触れた時間を一秒、 $f_1$  と  $f_2$  の間隔を一秒、二度目に触れた時間を一秒としよう。次に三秒間持続的に触り、その時に得た印象を  $f_3, f_4, f_5$  とする。ヒュームの言うように  $f_3, f_4, f_5$  が同一性を与える印象で、それと  $f_1 \cdots f_2$  を混同するのであろうか。我々は  $f_1$  と  $f_2$  の間の、触覚の印象が生じていない時に、つまりものに触れていない時に、印象が連続的に存在している（ものに触れている）と考えたりはしないし、その必要もないように思える。中断を無視したり、埋めたりする必要はない<sup>13)</sup>。我々は  $f_1$  や  $f_2$  という触覚の印象そのものを、連続的に存在する物体と考えることはない。連続的に存在すると考えられるのは印象ではなく「もの」である。それは「手を伸ばせば  $f_1, f_2$  に似た印象が生じるであろう」という信念を形成する。しかし、それは  $f_1, f_2, \dots, f_n$  という印象が連続的に生じていることを意味しているわけではない。「もの」が連続的に存在することと「印象」が連続的に生じていることはレベルの違う事柄なのである。

それゆえ、確かに「もの」と「知覚」は区別する必要がある。しかしそのことはヒ

ュームの言う「哲学的体系」のように、知覚とは別の種類の存在物を理論的に指定するということを意味しない。また、知覚は対象によって因果的に引き起こされるといふことも意味しない。ヒューム自身認めているように、このような体系は理論的に破綻しているものであり、受け入れることはできない。我々が認めなければならないのは、理論的な指定物としての「対象」ではなく、日常的な意味での「もの」の存在である。そしてその「もの」と哲学的な概念としての「知覚」を区別すべきなのである。ヒュームが議論の最初に、そして最後に認めているように、我々は日常生活において「もの」の存在を否定することはできない。哲学的理論的な分析において知覚の存在から出発するという事は別の次元の問題である。

### III 知覚因果説

哲学的な立場と日常的な信念を区別したとしても、なお問題は残る。哲学的立場として知覚を出発点に置けば、必然的にヒュームがその欠陥を認めた哲学的体系を採らざるを得ないのではないだろうか。

ここで、哲学的立場を明確にするために知覚主義と、知覚因果説を区別しておきたい。第一次的に我々が受け取るのは、知覚（表象）のみである、とする立場を知覚主義と呼ぶ。知覚因果説は、我々は外的な物理的事物からの因果作用によって知覚表象をもつ、とする立場である。知覚主義の立場を採ることが直ちに知覚因果説を認めることにはならない。そして、知覚主義はヒュームの哲学の基盤であるが、知覚因果説はそうでない、ということが私の主張したい点である。

しかしながら、ヒューム自身、知覚因果説を前提しているかのように書いている箇所も多くある。「印象は感覚の印象と反省の印象の二種類に分けられる。前者は未知の原因から本源的に心に生じる」(T7)。「外的対象はそれが引き起こす知覚によってのみ我々に知られる」(T67)。こうした表現を見る限り、ヒュームは知覚因果説も受け入れているように思える。問題は「因果関係」である。ヒューム哲学にとって因果関係は、中心的な位置を占める重要な概念であり、彼の定義によれば、因果関係の成立には過去における二対象の恒常の相伴の観察が必要なのである。ところが、知覚因果説における知覚表象の原因となる外的対象（物理的事物）は、原理上決して観察されることはできないのだから、知覚表象と外的存在が常に伴うことももちろん観察す

ることはできず、従って因果関係は成立し得ないのである。「因果関係は我々の知覚の存在あるいは性質から、外的連続の対象の存在への如何なる正当な結論も与えることはできない」(T216)。それゆえ、公式的にはヒュームは知覚因果説を認めることはできないはずである。

では、ヒュームにとって知覚因果説はどのような意味を持っていたのだろうか。知覚因果説は、ヒュームの知覚論、認識論が成立するための不可欠の前提であったのだろうか<sup>(4)</sup>。確かに先の引用からも分かる通り、ある意味でヒュームは知覚因果説を前提しているようにみえる。ある理論の前提になっていることは、その理論の枠内で証明したり、正当化したりすることはできない。もし、ヒュームが知覚因果説を前提しているとすれば、デカルトやロックと同様に、外的事物(客観的世界)と、知覚表象(主観的世界)の両者の存在を認める二元論の立場に立っていた、ということになるだろう。二元論を採っているとすれば、ヒュームが物体の存在の是非については、問うことが無駄であり、あらゆる推論において当然としなければならない、と言っていることも首肯できる。

知覚因果説と二元論は本当に不可欠の前提であったのだろうか。私はその点に関しては否定的に考える。まず第一に、ヒュームが存在を認めている「物体」は、上で述べたように知覚因果説において前提される知覚とは別の種類の存在である物理的事物ではなく、常識的、日常的意味での「もの」と考えるべきである。我々は、「物体」について、考えたり反省したりする前にその存在を確信している。その存在には、知覚因果説や二元論、あるいはいかなる理論の前提も必要ないのである。第二に、ヒュームにとって「知覚」は、それのみで存在できるものであり、知覚を引き起こす外的事物の存在は必ずしも要請されていないし、不可欠のものではない。ヒュームが感覚印象(知覚)を「実在」と呼んでいることから分かるように「感覚印象(知覚)」は実在的、物理的な実体の写し(表象)ではなく、それ自体が独立に実在するのである。(cf. T108)

ヒュームの立場を先に定義した知覚主義の立場であると考えれば、知覚因果説は、明らかに別の主張である。ヒュームは確かに、当時の科学的な常識として、知覚因果説がそれに類することを受け入れていたであろう。「本源的印象つまり感覚的印象は、何等それに先行する知覚なしに、身体の構造によってか、動物精気によってか、対象が外的な感官にふれることによってか、精神に生じる」(T275)。しかし、ヒュー

ムにとって感覚知覚がどのようにして生じるのかは、基本的には自らの哲学の範囲外にある問題であって、「解剖学者や自然哲学者に属する」問題なのである。ヒュームの哲学の領域は我々に直接与えられる「知覚」の領域である。そこには、「知覚」を引き起こす、知覚の原因としての物理的対象は原理的に入ってくることはできない。実際に見たり触ったりしているもの（知覚）が存在することには疑問の余地はない。その知覚が物理的事物が感覚器官に働きかけることによって生じるのかどうかは、自然哲学（自然科学）の問題である。専門外の領域については、専門家の説を受け入れるというのは、それ程非難されるべき態度ではないであろう。ヒュームが知覚から出発する以上、そして、ヒュームの哲学の領域が知覚の領域である以上、知覚の存在は最初から確実なのである。どのようにして知覚が生じるかという問題にはヒュームにとって哲学的に重要な意味はなかったと思われる。問題は、見たり触ったりしているものが、見たり触ったりしない時にも連続的に存在する、あるいは見る見ないにかかわらず存在すると我々が考えるということにある。それがヒュームの問題にしたことだった。

しかしながら、ここで問題がある。我々は、知覚因果説を科学理論として認めることができるのだろうか。現在の科学的説明によれば、我々がものを見る際には、対象からの光線→角膜→水晶体→網膜面上での結像→光エネルギーの神経インパルスへの変換→視神経→大脳視覚皮質、という物理的生理的過程が生じているはずである。外的事物に発し感覚器官、神経を経て脳に終わるしかるべき因果系列が成立していることは、知覚の成立の必要条件と考えられよう。しかしこのことは、外的事物からの因果作用によって知覚表象が生じるという知覚因果説の主張を含意してはいない。知覚表象は科学的に観察不可能なものであるから、因果系列の最終項として知覚表象を設定することはできない。知覚因果説と知覚の科学的（物理的生理的）な説明とは、別の主張である。そして私は、この説は端的に偽であると考えている。外的事物、感覚器官、神経、脳の間因果作用があることを認めるとしても、その因果系列と知覚表象の間に因果作用を言うことはできない。知覚因果説と知覚の科学的説明は、明確に区別すべきである。知覚の科学的説明は知覚主義とも直接実在論とも両立し得るのである。



#### IV 知覚の三通りの説明

ここで、知覚を記述する三通りのしかたを区別したい。

A 私は机を見る。

B 物理的事物（机）から発し、感覚器官、神経を経て脳に終わる因果系列が成立している。

C 私に（机の）視覚的印象が生じている。

Aは、日常言語で述べられた最も普通の言い方であろう。Bは、知覚の科学的説明と呼んでおく。Cは、表象主義的な説明（上に論じた知覚主義の立場の中心的部分はこのように定式化し直せるであろう）である。

ただし、注意しておきたいのは私はここで存在論的、あるいは形而上学的主張をしている訳ではないということである。確かに、それぞれの記述における机、物理的事物、視覚的表象は、存在論の身分は異なるであろうし、三者とも存在物として認めれば二元論ならぬ三元論の立場を採ることになるかもしれない。しかし、私はここでは存在論的には中立の立場を採っておきたい。

何が存在するか、という問題はむしろそれぞれの記述あるいは理論に相関的である。それぞれの記述を採用する時（無論我々はAの記述は採用する訳ではなくこのように言語を使うように決定されている訳だが）、その枠組みにおいて何が存在するかは、決定されるのである。A（日常言語）に関しては、かなりの存在論が曖昧であることは認めなければならないが、少なくともB、Cに関しては、科学と哲学（表象主義）が整合的な理論である限り、その理論の枠内においては何が存在するかは確定されねばならない。しかしながらそれは、別の記述、理論における存在を否定することは含意していない。物理的事物のみが存在し、心的な表象は存在しないというのは、科学的理論の枠内で主張できることである。逆に現象主義者は表象のみが存在し、物理的な事物は存在しないと主張するであろう。また、二元論者は、物的な対象も心的な対象も存在すると言うだろう。それゆえ、これらの問題は「存在」という語の意味と共に、如何なる理論を採用するかの問題でもあるのである。もちろん、もの存在についての日常的な信念は捨て去ることはできない程強固である。A（日常言語）に関しては、それを採用するかしないかは我々が選択できることではない。それ

ゆえ、我々は、如何なる理論を採用しようとも、その理論の枠内で「存在」「非存在」を確定することはできても、日常的な常識的なものの存在に対する信念を否定することはできない。あるいは、他の理論における存在の概念を否定できない。ただし、この事についても完全に不可能という訳ではない。ある理論（たとえば科学）が常識の一部になることによって、常識的な信念の一部を改訂することはあり得ることである。しかし、科学あるいは他の理論によって日常的な「存在」の意味を説明、定義し尽くすことは不可能であろう。

「我々が知覚するのは外的事物ではなく内的な知覚表象である」とする一般的な表象主義（知覚表象説）の定式化は多くの問題を抱えているため、私は「私に（机の）視覚的印象が生じている」という形で表象主義を定式化した。一般的な表象主義の立場を採れば、我々は外的な物体を間接に知覚するか、全く知覚できないかのどちらかの道を探らねばならない。しかし、どちらの道も困難な問題を含んでいる<sup>9</sup>。ここで、その問題に答える準備はないが、一点だけ注意しておきたい。一般的な知覚表象説は、知覚を「作用—対象」に分析して考える。確かに我々の日常言語においては、机（対象）を見る（作用）という言い方をするのは自然である。しかし表象主義の立場においてもその分析を使うべき理由はないように思われる。むしろ「作用—対象」分析を使うことによって、日常言語と表象主義の立場が混同され、不要な問題が生じる。我々は外的物体を知覚しているのではなくて、内的な知覚表象を知覚しているのであると言うのであれば、「知覚する」という言葉をどのような意味で、つまり表象主義の理論によって定義される意味で使っているのか、日常的な意味で使っているのかが問題になる。たとえ、表象主義の理論の枠内で内的知覚表象を「知覚する」、外的物体を「知覚しない」あるいは「間接的に知覚する」ということが正しいとしても、日常言語において「机を見る」と言うことが偽になるわけではない。ここでは「私がものを知覚しているときには、ある知覚表象が生じている」と表象主義の立場を定式化すれば多くの困難が避け得るという点を指摘しておくに留める。

問題はこの三者の関係である。たとえば、直接実在論者にとってはBはAが成立するための必要条件とみなされるし、先に見たように、知覚因果説の信奉者はCをBの因果系列の最終項とみなす。三つの記述の関係は、Aの時、科学的に説明すればBであり、表象主義的に記述すればCである、という関係であると考えべきだろう。つまり「私が机を見る」時、（科学的には）「物理的事物から発し、感覚器官、神経を経

て脳に終わる因果系列が成立しており」(表象主義的には)「私に視覚的印象が生じている」。私は三つの事象が同一であると主張している訳ではない。同一であると言うには、「同一」の意味を確定することが必要であり、ある理論を採用しなければならぬ。そこでここでは三者が同一であるのか、一つの事態を三通りに記述しているのかという問題は論じないでおく。

問題はCの記述が必要かどうか、あるいは有効かどうかである。我々は、Aの記述を捨てることはできないし、Bの記述の有効性も認識している。多くの哲学者は表象主義的な記述(特にそれがセンス・データ言語と同一視される場合には)は可能ではないし必要ないとみなしてきた<sup>6)</sup>。しかし、上の形での表象主義の立場は、それ程受け入れ難いものではないであろう。そして「ものを知覚する」という日常的事態を知覚表象のレベルから分析することは、無意味なことではない。例えば、先に述べた触覚の例で我々がものがあると思う事態を、触覚的印象から、つまり f1, f2……から分析していくことは我々がものを知覚する際の機構を解明する上で有効な方法ではないだろうか。そして、その時我々の過去の経験、概念的枠組みが、知覚に大きく影響することが明確になるのである。ヒュームの因果性の分析もこのような哲学的立場を採ることによって可能になったと言えよう。

ここで、表象主義の立場の有効性と必要性について論じる紙幅はないが、最後にコンピュータ科学でよく使われる 比喩を使っていえば、ハードウェアの説明(物理的、生理的説明)とその振舞いの説明(日常言語による説明)だけでなく、プログラムの説明のレベルがあり、プログラムのレベルはハードウェアからは独立に論じることができる、ある意味で抽象的なレベルなのである。表象や枠組みといった概念は、そのようなレベルで機能する概念と考えられるのではないだろうか。そのようなレベルでの記述は、少なくとも我々の知覚の分析を進めるのに有効な記述であると私は考える。

#### 註

- (1) T～ はヒューム『人間本性論』の頁を指す。David Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed. by L. A. Selby-Bigge, second edition, O. U. P., 1978
- (2) D. Pears, *Hume's System*, O. U. P., 1990, p. 187.
- (3) H. H. Price, *Hume's Theory of the External World*, O. U. P., 1940
- (4) 神野慧一郎『ヒューム研究』ミネルヴァ書房, 1984, pp. 61ff

- (5) 木曾好能「直接知覚か非知覚か」『哲学』日本哲学会編，第32号，1982，pp. 48ff
- (6) J. L. Austin, *Sense and Sensibilia*, O. U. P., 1962

〔哲学 博士課程〕

# Perception and Object

—Using the clues of Hume's theory—

Taketo IWASAKI

In this paper, I propose to clarify the conception of 'perception' and defend a kind of representationalism.

First, I examine Hume's theory of perception, focusing on perception of external objects. Using Hume's argument, I conclude that we should distinguish 'perception' in philosophical theories from the concept of 'object' found in ordinary life.

Then I proceed to investigate the causal theory of perception (CTP). I show that Hume seems to have assumed CTP although he could not admit at least as a part of his own theory. I reject CTP because the causal connection between physical objects and mental representations CTP postulates is not supported by scientific evidence. We should admit only scientific analysis which explains the causal connection completely in the physical domain.

Three different descriptions of the perception can be distinguished ; (a) ordinary language : "I see the desk," (b) scientific analysis : "the physical object causes the brain state," and (c) representational analysis : "visual perception occurred in me."

If we separate these three levels of description, we can avoid a great number of problems with the theory of perception. Although representational analysis (c) is controversial, I believe it is necessary and useful in clarifying the structure and function of perception. It is also the method Hume used in his own philosophy.